十勝毎日新聞

発行所
十勝毎日新聞社
〒080　帯広市東1条南8丁目
電話=編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉔2222
©十勝毎日新聞社 1985

目指せ宇宙基地 ①

行き詰まる種子島

決して夢でない調査結果

北海道東北開発公庫開発企画部長
高田喜義さん（49）

北海道東北開発公庫が「北海道東北21世紀展望報告」の中で北海道に航空宇宙基地を誘致する構想を打ち上げ、道も調査に向けて動き出した。二十日には産・学・官一体となった「道航空宇宙産業基地研究会議」が発足する。仮に北海道誘致が成功した場合、関係者の間で立地の可能性が強いと言われているのが苫東と大樹町だ。それだけに十勝にとってこの構想は他人事ではない。二十一世紀の大きな可能性を秘めた航空宇宙産業基地に対する各方面の提言、意見を聞いてみた。

北海道、東北の二十一世紀　道東北21世紀展望報告」。サーを展望した夢のあるプロジェ　モンパーク構想などの小さなクトを考えてみたのが「北海　もの、イベントなどのソフト

すなど、にわかに注目され出したのが航空宇宙基地構想。北海道の経済は長高重大の素材型産業でハイテクの面では立ち遅れている。これを一挙に取り戻し、二十一世紀への夢をつなぐのが宇宙基地構想だ。追跡調査をした結果、今は決して夢ではないと思うようになった。

その理由は日本の宇宙産業がテイク・オフ（離陸）前夜なもの、航空宇宙基地などの大きくてハードなものなどまざまな開発構想を提言、実現の可能性の調査を進めてきた。

このうち道が長期計画に盛り込み、道開発庁が関心を示であることだ。それは日本もスペースシャトルを打ち上げる検討に入っているうえ、今まで三百五十㌔のものしか運べなかったロケットが、六十六年に完成するH－II型は二㌧まで宇宙に運べる。米国ほど大型なシャトルではないものの、有人の可能性も出てきた。

一方、日本の打ち上げ基地、鹿児島県種子島は漁業補償の関係で正月と盆の年二回しか打ち上げられない状態。H－IIの有人シャトルを宇宙で新素材を使う産業用に使うとなると、年二回では必ず行き詰まるはずだ。

宇宙基地となると、広大な土地、しかも周りに人家がない、水が豊富で情報化の進んだ所－などの条件が必要。そうなるとやはり北海道の可能性が大きい。

今の段階ではとにかく北海道に誘致したい－ということしかし大樹町にも可能性は十分備わっていると思う。

二十日には札幌で産・学・官一体となった「道航空宇宙基地研究会」が発足する。十一月にはシンポジウムを開き、宇宙基地の可能性を探るつもりだ。

私は四十四年、国の新全総の関係で大樹の大規模工業基地の可能性を調べるため、再三十勝に入り、町議会で講演したことがある。再び宇宙基地構想で大樹町にかかわりを持つことになりそうだが、ぜひ大樹、また十勝の中心都市帯広の行政、経済人もシンポジウムに参加するなど、航空宇宙基地の可能性を抱いてほしい。

（つづく）

〈略歴〉昭和十一年赤平市生まれ。三十五年北大法学部卒業後、北東公庫に入り、企画室長、総務部次長を経て、四月から開発企画部長。